2016/10/4

キリスト教学専修

＊第二演習・２０１６年度後期＊＊＊＊＊＊＊＊

Ａ．予定　（同学年は五十音順）

第五講義室：

毎週・火曜日・１コマ　→　１コマ１人：６０分の発表＋３０分の質疑応答

担当者は資料を準備の上、発表。パワーポイント使用可。

Ｂ．関連するプログラム

１．研究室紀要の刊行：３月刊行

・第二演習での発表　→　論文、書評、サーベイ

・学会発表（近畿支部会）の予行：２０１７年３月

・原則的には：大学院生全員が参加（博士後期課程だけでなく）

＊書評：金子晴勇『キリスト教人間学入門――歴史・課題・将来』教文館、2016年。

芦名定道

序文――わたしたちはキリスト教人間学で何を学ぶのか

Ⅰ　人間学との関係

1　科学時代における人間の問題

2　カントの問い

3　シェーラーの人間学的な問い

4　人間学の方法

5　キリスト教人間学の特質

Ⅱ　聖書の人間観

Ⅲ　キリスト教人間学の歴史

1　アウグスティヌスの人間学

2　トマス・アクィナスの人間学

3　中世の神秘主義（ベルナーつとドイツ神秘主義）

4　宗教改革時代の人間学（エラスムスとルター）

5　近代の人間学（デカルト、カント、シュライアーマッハー、メール・ボ・ビラン）

6　解体の時代の人間学（フォイエルバッハとキルケゴール）

7　現代の人間学（シェーラーとプレスナー）

8　現代のキリスト教的人間学（バルト、ブルンナー、ニーバー兄弟、ティリッヒ、パネンベルク）

Ⅳ　キリスト教人間学の課題

1　「神の像」と「人間の尊厳」

２　性善説と性悪説（良心概念の検討）
３　対話と応答的人間
４　人間と人格の区別
５　罪とその救い
６　信仰のダイナミズム（感得・受容・合一・変容・超越・媒介）
７　信仰と愛のわざ
８　キリスト者の試練
９　人格共同体
10　文化と歴史

Ｖ　キリスト教人間学の将来
１　キリスト教人間学の意義
２　キリスト教的人格性の特質
３　キリスト教的な人間関係論
４　霊性の特殊性と普遍性
５　仏教的な霊性との対話
６　キリスト教に深化と普遍性

参考文献
あとがき

＜抜粋＞
本書『キリスト教人間学入門――歴史・課題・将来』はわたしがこれまで長い歳月をかけて探求してきた研究課題の最終報告書である。というのも、わたしは哲学の分野としては「人間学」を、思想史の分野では「ヨーロッパのキリスト教思想史」を、それぞれ選んで研究を続けてきたが、この二分野を総合すると「キリスト教人間学」となるからである。（271）

Ｉ　人間学との関係
「「キリスト教人間学」に先立って「人間学」自体がマックス・シェーラー」
「一般的人間学が先行してこそ、その特殊な形態である「キリスト教人間学」は学問的に論じられる」（9）
「「人間とは何か」という問題意識」、「ソポクレスによると人間は不思議な存在である」（10）
「旧約聖書におけるイスラエル人の信仰物語や新約聖書の福音書にあるイエスの物語を使って、キリスト教人間学の基礎を説明するように努めた」（15）
「現代は科学の時代である」、「人間学の時代」、「マックス・シェーラーによって初めて学問的に「人間学」が組織的に確立されるようになった」（18-19）
「ボルノウ」「人間学の方法」「人間学的還元の原理」「人間学的構成の原理」「人間学的未確定の原理」（26）

「一般的で哲学的な人間学との相違点」
「人間学的区分の相違」「霊・魂・身体」「人間学的三区分」
「人格としての人間の捉え方」
「「神の前に立つ人間」を表わす言葉」(28)

Ⅱ　聖書の人間観
「人格神に対する信仰にて形成された人間観」(32)

Ⅲ　キリスト教人間学の歴史
「人間学的三段階説」(63)
「中世の哲学」「スコラ学」(71)
「彼の神秘主義」(79)
「新しい敬虔」「霊・魂・身体」(82)
「霊なる最内奥において人は神と出会い、神の導きの下に理性は自己を統御し、外なる身体を介して世界に連なっている。人間とは神と世界とのあいだに立つ存在なのである」(91)
「近代自然科学の成立による自然の発見」(93)
「近代の新しい人間学は、神や世界から人間を位置づけるのではなく、人間の世界経験からすべてを合理的に解明していくところに現われている」(96)
「カントの人間学」「自由意志」「理性的な「自律」」(99)
「シュライアーマッハーの人間学」「人間が根源的に受動なものとみずから感じるもの」(102)
「後期バルト」「バルトは神学を人間学的前提から解放しようとしたが」(123)、「神学的前提に立つ人間学は排除されていない」「人間イエスの共同的な人間性」(124)
「パネンベルク」「神学の基礎学としての人間学」(133)
「内村鑑三の人間学」「人の三性」(135)
「キリスト教人間学の三区分に対する内村の説明」(136)
「心霊の実験」「私の全有 whole being」(138)

Ⅳ　キリスト教人間学の課題
「現代においても考察すべき課題」「一〇の主題」(153)
「神の像」「人間と神との特別な関係」「契約」(158)
「「神の像」と「人間の尊厳」とは異質なものであるが、ヨーロッパの思想史ではときに総合的に把握されてきた」(160)
「人間と人格の区別」(173)
「アウグスティヌス」「原罪を伝播する働きが情欲や邪欲にある」(179)

Ⅴ　キリスト教人間学の将来
「課題は」「これから将来にわたって解明し続けられねばならない」(216)
「キリスト教人間学の意義」
「伝統的な哲学的区分法」(217)

「キリスト教人間学の三区分法（霊性・理性・感性）」（219）
「霊の作用による「キリスト教的人格性」」（222）
「個人」「社会」「歴史における変化」
「相互承認と相互受容」（225）
「人間関係論」「他律・自律・神律」（228）
「日本人の社会性」「恥の文化」（231）
「霊性の普遍性と特殊性」「日本人の霊性理解」（235）
鈴木大拙、西田幾多郎
「霊性の人格的情緒的側面と知性的直観的側面との相違」（239）
「仏教的な霊性との対話」「「神の像」と「仏性」との対比考察」（240）
「仏教とキリスト教との対話」「禅との対話」「ルターと親鸞」（246）
「逆対応と超過の論理」（250）
「東西の霊性の共通点」（251）
「最晩年の思想において西田はキリスト教も仏教も相互に相手から学ぶべきものを示唆する」「日本仏教は、そうであるだけますます知性的に深淵な洞察力を秘めており、その反対に今日のキリスト教は、あまりに活動的になると、思想的に貧困化するおそれがあるため、仏教から学ぶことも多くあるのではなかろうか」（255）

「この著書の全体を通して研究の核心となっている「キリスト教の三区分法」」「エラスムスとルターから学んだもの」（272）

＜書評＞

著者金子晴勇氏は、アウグスティヌスやルターの研究において日本を代表する研究者であり、これまで多くの著作を出版してきた。本書は著者の長年の研究の到達点を示すものであり（「これまで長い歳月をかけて探求してきた研究課題の最終報告書」）、しかも、「入門」とあるように、その研究成果を専門家だけでなく一般の読者に向けて解説することを意図している。本書を通して優れたキリスト教思想研究の成果に触れることがことを共に喜びたい。

これまで著者は、哲学とキリスト教思想史（ヨーロッパ）という二つの領域で研究を行ってきたが、「キリスト教人間学」というテーマは、これら二つ、つまりキリスト教思想史と哲学的な「人間学」とを総合するものとして位置づけられる。本書では、まず「キリスト教人間学」を構成する二つの研究領域をそれぞれ概観した上で、「キリスト教人間学」の内容へと考察が進められる。その点で、「Ⅰ　人間学との関係」と「Ⅱ　聖書の人間観」とは、本書の中心である、ⅢとⅣのいわば導入とも言えるが、それぞれ、マックス・シェーラーによって組織的に確立された哲学的な人間学と人格神に対する信仰において形成された聖書的な人間観の説明となっている。「Ⅲ　キリスト教人間学の歴史」と「Ⅳ　キリスト教人間学の課題」は、「キリスト教人間学」を歴史的展開（アウグスティヌスから現代のキリスト教思想まで）と体系的諸問題（一〇の主題）の両面から叙述したものであり、キリスト教人間学の思想史と体系論と解することができるであろう。そして、本書は、将来の研究に残されたキリスト教人間学の課題（「Ⅴ　キリスト教人間学の将来」）を明示

することによって締めくくられる。

以下においては、本書の豊かな内容から、特に注目すべきポイントについて紹介したい。まず紹介したいのは、キリスト教人間学における人間学的三分法である。著者自身は、「むすび」において、「キリスト教の三分法」を「この著書の全体を通して研究の核心となっている」こと、それは「エラスムスとルターから学んだもの」であることを強調している。哲学的伝統において人間はしばしば「精神と身体」といった二分法で捉えられているが、著者は、聖書的人間理解（パウロ）が人間を「霊・魂・身体」の三分法に特徴があること確認した上で（Ⅱ）、たとえばルターにおいて、それが思想的に明確な仕方で表現されていることを示している。「霊なる最内奥において人は神と出会い、神の導きの下に理性は自己を統御し、外なる身体を介して世界に連なっている。人間とは神と世界とのあいだに立つ存在なのである」（九一頁）。こうした人間理解はヨーロッパのキリスト教的伝統を形成し、個人の倫理性から社会制度に至るまで大きな影響を与えている。

しかし著者は、このキリスト教人間学の射程が、ヨーロッパを超えて、日本の文脈においていかなる意味を有するかという問いへと議論を展開している。詳細は本書を精読いただく必要があるが、著者はキリスト教人間学の三分法を内村鑑三において確認し（一三五―一四二頁）、さらに人間学という視点からキリスト教と仏教の対話の意義について言及している。このキリスト教と仏教との対話はすでにかなり蓄積を有しているわけであるが、こうした将来的課題にとって確かな大きなにはさらに探求すべき将来的課題が存在している。

著者の開拓したキリスト教人間学の研究は、キリスト教の将来的課題に取り組む上で、確かな道しるべとなるものと思う。今後のキリスト教人間学の展開に期待したい。

＜哲学的人間学とキリスト教思想＞

１．人間をめぐる近代科学の進展

・生物学、進化論

・認知科学

２．哲学的展開＝哲学的人間学

・世界開放性＝超越性

・世界内存在と理解

３．キリスト教思想

・人間存在と神の問い

・問いに対する答え

４．植村正久『真理一斑』1884年（著作集４、新教出版社）

「天下の人ことごとく一つの理想を慕いまた一つのキリストを設けざるは無し。偶像を拝し、或いは特殊なる思想に心酔してこれを楽しみ慕いて、一生を送るがごときは皆キリストを求むるより起これり」、「吾人は彼の偶像教のうちにも、キリスト降世を預期するものあるを見るべし」（165）、「ここにもキリストかしこにもキリストと言うものあるは、キリストの需求実に人性の需求なるを知るべし。しかれども人性の需求は必ず応験を有するものなり」、「キリストを求むるの念は自然に備わり排除するを得ず」、「キリストは万国民の渇望するところなり。」（166）

「進歩の順序は常に特選の一個人より始めるものなり」、「宇宙の傾向は、或る最も特殊にして善尽くして、美尽くしたる形状を出すに在りと断定せざるべからず」(168)、「万物は皆キリストを待ちて、その出現の預言をなせりと言わざるを得ず。キリストは万物の依って立つところ天地の帰向する所、人世の歴史ついにキリストの一身をもって集中となす、万物皆その国の隆盛を翼賛し、古今人の経営する所、ことごとくその栄に帰せんとす。」(169)